

新入生を海外へ送り出そう！

広島大学教育・国際室国際交流グループ研究員 梅村 尚子

UMEMURA Hisako

1. はじめに

近年、日本社会では「グローバル人材育成」の重要性が叫ばれるのと同時に、若者の「海外離れ」や「内向き志向」が繰り返し話題に上っている。留学を担当する部署の一スタッフとして日常的に学生から留学相談を受けている筆者の立場では、世間で騒がれているよりもずっと、外に目を向けている学生は多いように感じている¹が、こうした社会背景に伴い、これまで国際教育交流についてどちらかと言えば外国人留學生の受入れにばかり注目しがちだった日本政府や高等教育機関が、海外派遣の強化に力を入れ始めたことは歓迎すべきである。本学も例外ではなく、派遣學生の増加に向けた取組として、2010年度に新たに開始したのが、本稿で紹介するSTARTプログラムである。とにかく学部1年生を入学後間もない時期に海外の協定大学に派遣し、まずは留学とはどういうことなのかを体験させ、興味を持たせようという、正に本号のテーマである「留学の動機作り」を目的としたプログラムである。夏季及び学年末の長期休暇を利用し、初年度はオーストラリアとベトナムへ、2011年度はオーストラリア、アメリカとベトナムへ各回20-30名で計5回のプログラムを実施し、全体で127名の學生を派遣した。これらの修了生が2年次生、3年次生として交換留学などに挑戦する今年度こそ、本プログラムの真の効果が問われるときであるが、ここでは、本取組の概要を紹介し、現時点までで見て来た効果と可能性について考察する。

2. STARTプログラムの概要

「START (スタート)」の名称は“Study Tour Abroad for Realization and Transformation”の頭文字を取ったもので、海外経験の少ない新入生が海外の大学やその周辺都市への訪問、異なる文化や環境の体験を通して新たな価値観に「気づき (Realization)」この体験を通じた学びによって新たな自分へ「変革 (Transformation)」し、今後の大学生活とその先の人生をより充実したものにする「第1歩 (スタート)」になりますように、という願いを込めて筆者が付けたものである。本学ではこれまでも、夏季休暇中の語学研修、半年から1年間の交換留学、各学部や研究科で実施するプログラムなど、複数の留学の機会を提供してきているが、導入レベルのプログラムがなく、海外や留学に馴染みの少ない學生や語学力の面で伸び悩んでいる學生にとってはややハードルの高い入り口だった。そのような中で新設したSTARTプログラムは、従来留学に目を向けて来なかった學生や、海外に興味は持ちながらも入り口のハードルを越えきれなかった學生も、気軽に留学に挑戦するきっかけを掴めるようにすることを目的としている。

海外渡航中のプログラム内容は、海外協定大学を主な拠点とし、現地教員によるその国や地域の社会と文化、日本との関係などに関する授業と、非英語圏の場合は現地の語学授業の受講や、現地學生との交流、日本文化や広島大学の紹介、授業と連動

した資料館等の施設見学など多岐にわたる体験的学習である。可能な場合は、学生寮の滞在や日帰りのホームビジットまたは1泊2日のホームステイなども組み込んでいる。全学部の学生を対象としており、毎回定員を超える申し込みがあるため、書類とグループ面接で選考を行っている。

STARTを誰でも気軽に挑戦できるプログラムにできた主な要因は(1)経済的支援の充実(2)海外渡航経験のない学生を前提としたきめ細かなケア(3)引率付きのグループ渡航の3点である。第一に、留学を考える際、多くの学生が懸念するのは費用面だろう。STARTでは派遣先の国や地域にかかわらず学生の負担は一律5万円で、残りは広島大学基金と留学生交流支援制度(ショートビジット)奨学金(一部のプログラムのみ)で賄っている。実際、「海外に行くなんて自分には縁のないこと」と考えていた学生が「5万円で行けるなら出してみようか」といって申請してきたケースもある。

第二に、STARTの特徴は充実した事前事後学習であると自負している。2週間という短期間の海外研修を真に実りあるものにするためには、事前準備をどこまで出来たかが重要である。事前学習ではパスポートの取り方や海外渡航時の危機管理・健康管理のレクチャーから現地事情および日本文化と社会についての自主学習と発表まで、渡航前に約2カ月間かけてしっかりと準備をさせており、事前学習に熱心に取り組んだ学生ほど、留学中にその意義を実感したという感想を述べている。また帰国後には、レポート提出のほか、帰国して2-3週間後にフォローアップセッションを行い、各自の体験と学びを同行したグループの学生や教職員と共有し、この体験を今後の学生生活にどう活かしていきたいかを考えさせる。フォローアップ後の感想では、海外研修中に感じたり考えたりしたことについて理解を深められたことや、今後様々なことに挑戦していこうという決意が述べられている。

第三に、初めて海外に赴く学生やその保護者にとって大学の教職員が引率するプログラムは安心感を与える。申請書や面接時の志望理由でも、もともと海外に興味はあったが自信がなく、これなら引率や同行する学生もいるので安心だと思った、と述べる学生も少なくない。また、日頃知り合うことの少ない他学部の学生や教職員と出会い、2週間教職員と寝食を共にしながら語り合うことで得られる発見や刺激もSTARTならではの収穫である。学部や専攻が異なっても、「国際交流」という共通の(そして必ずしもクラスメートが共有しているわけではない)関心事があることは彼らの結びつきを非常に強くしている。

3. 新入生へのこだわり

このプログラムを立ち上げて以来、学生からたびたび問い合わせられるのは「なぜ1年生しか参加できないのか」ということである。2年次生以上の自分たちにとってもこのような機会は必要だ、とか、自分が1年生のときにはこのようなプログラムは存在しなかったのが不公平である、といった訴えが多い。彼らの言うことはもっともで、むしろ2年次生以上であるからこそこのような機会の貴重さを実感できているところもあるだろう。立ち上げ当初、担当者としてこうした質問を受けながら、私自身も「別にそこまで新入生にこだわらなくても」とか「同じ広大生として上級生にも機会を提供した方がいいのでは」などと考えたこともあったが、学長自らの強い意向も

あり、実際に2年間「新入生」にこだわって実施してみた今、このこだわりは非常に大切なことだったと実感している。

まず、このプログラムを長期留学のための事前準備と位置付けるなら、4年間で卒業することを前提とすると2年次以上になってからでは間に合わない。また、どの国でも学生たちが最も衝撃を受けるのは、各国の学生たちの学問に対する姿勢の熱意と真剣さが日本の学生と比べて非常に高いことである。1年次生ならそれまでの半年ないし1年間の学生生活をふり返り改善するのにいい時期であるが、2年次生以上では挽回するにも残り時間が少なすぎる。そして学生とプログラムを運営する我々双方に大きなメリットとなるのは、STARTに参加した学生たちが、この機会をより多くの学生に体験してほしいと感じてくれて、プログラムの広報活動やオリエンテーションなどの活動に積極的に参加し、学内の国際交流を活性化させるのに大きな役割を果たしてくれることである。参加学生にとって、残りの学生生活の間中STARTでできた繋がりを維持し、互いに刺激し合い続けることは大きな励みになるし、後輩のサポートすることは自らの経験を再認識する機会にもなる。運営側にとっても、新入生に対して同じ学生である先輩が語る言葉ほど雄弁で心に響くものはなく、彼らが積極的に2-3年の間STARTに関わり続けてくれることはメリットが大きい。これが2年次生、3年次生では、協力したい気持ちがあっても、すぐに就職活動や卒業論文などに追われ、こうした時間を取ることは困難であることが予想される。

4. STARTプログラムは動機作りに成功したのか

さて、このプログラムは本当に学生たちにとって留学への動機づけとなったのだろうか。筆者の答えは、3割No、7割Yesである。そもそも海外研修に申込みうと考える時点で、ある程度は海外渡航や留学に関心を持っているケースが多く、申請者の約半数は「大学生になったら留学したいと思っていた」という学生である。彼らの場合、既に動機があるわけで入学時から各種留学や国際交流の機会にアンテナを張っており、STARTが直接動機作りになったとは言い切れないⁱⁱ。しかし、残り約半数の、「たまたま授業で隣に座った学生が申請書を書いていてSTARTの存在を知った」「5万円なら自分にも行けるかも」といったハプニング的にSTARTに出会った学生に対しては、動機作りに成功したと言えるだろう。また、もともと関心を持っていた学生でも、STARTのような機会がなければ願望や憧れのまま終わっていた可能性もある。START開始以前に入学した学生たちが、3年次、4年次になってから留学に興味を持ったが時すでに遅しで、自分たちが1年生の時にもSTARTがあれば学生生活が変わっていたかも、と話しているのも耳にした。こうした「予備軍」をすくい上げられたという意味では、漠然とした願望を行動に移すための動機作りには成功していると言える。このプログラムを通して学生たちが学んでいることは、留学の基本もさることながら、いろいろな情報にアンテナを張っておくことや、とりあえずチャレンジしてみる精神を持つことであり、これは留学に限らず、学生生活や人生の様々な場面で重要な姿勢でもある。

5. 動機作り後に求められる支援

ここで我々が忘れてならないのは、動機づけはあくまでも動機づけであり、本題はこの成果を次にどう発展させられるか、であるということだ。つまりSTARTを修了し

た彼らに、さらにステップアップしていこうという意欲を持たせ、次に活躍できる場を見つけさせなければ、動機づけをした意味がない。自らの現在の立ち位置を認識させ、次のステップへの意欲を持たせ、さらに本学が提供している「次の活躍の場」について情報提供するところまでは、START のフォローアップで行っている。実際に、START 修了生たちは国際交流活動に積極的に参加したり、アルバイトとして運営に携わったり、3週間以上の語学研修に参加したり、東北の震災復興ボランティアに参加したりと、多方面において活躍してくれている。2011年度の交換留学（HUSA）募集時には40名の応募者中11名が、うち合格者30名中8名がSTART参加学生であった。START終了後もメーリングリストやFacebookなどを活用して、学生同士のコミュニケーションが活発であったり、我々からも各種留学情報の提供やボランティアの依頼などを通して繋がりを維持していることも、学生と大学の相互理解やサービスの充実に役立っている。また、Facebookを活用して学生たちはSTART派遣先で出会った学生や教職員とも連絡を取り続け、彼らが旅行や留学で日本に来た時に日本を案内したりして、様々な交流が続いている。

本学では今年度も、語学研修のプログラムを増やしたり、留学相談や留学プログラムの情報提供の仕方に工夫をしたりと、引き続き支援を強化していく予定である。過剰に世話をし過ぎてもいけないが、痒いところに手が届くような支援体制を整え、動機づけをされた学生たちがさらに意欲を持って勉学や様々な活動に取組み、在学中から卒業後まで、幅広く活躍していくための一助を担うことができれば光栄である。

6. 最後に

取組開始から2年が経過し、すでに本学においてSTARTプログラムの存在は留学交流を語る上で欠かせないものである。今年度からは教養教育科目として単位を付与することになり、新たな派遣先も加わり、まだまだ発展し続けているプログラムでもある。最後に、このプログラムが成功している背景には、広島大学基金及び留学生交流支援制度（ショートビジット）の多額な経済的支援と、先人たちが築いてきた友好的な大学間関係の上に成り立つ、協定大学の多大なる協力があればこそ可能であることを強調しておきたい。

ⁱ 本学ではこれまで、主に交換留学（HUSA）プログラム担当教員や職員が学内全体の留学相談窓口を担ってきたが、必ずしも学内すべての留学プログラムについて把握していなかったし、漠然とした相談をしたい学生が気軽に来られる体制ではなかった。2011年度より、全学の留学プログラム情報をまとめたパンフレットを作成し、留学経験のある学生を留学アドバイザーとして雇用し、漠然と留学を考え始めた学生から申請についての具体的な内容まで、気軽に相談できる場所づくりと学生目線でのアドバイスの提供を開始した。留学アドバイザーが受けた相談は雇用を開始した7月から年度末までで延べ84名。アドバイザー不在の時間に国際交流グループ職員が受けた相談件数と合わせれば年間100回を超える相談を受けたことになる。

ⁱⁱ ここ数年で、本学では留学生支援及びキャンパスの国際化の取組として、学内での国際交流活動の活性化にも力を入れている。留学生と日本人学生をマッチングさせて互いの言語の練習相手となる会話パートナー、週に1回留学生と日本人が集まって一緒に昼食を取りながら話をする場を設ける International Luncheon、メーリングリストに登録して学内外の国際交流行事やボランティアの案内を流す NOIE (Network of International Exchange) などの活動が充実しており、こうした活動への参加を機に国際交流に興味を持ち、STARTに応募した学生も少なくない。